

合理的配慮の提供事例報告書【小学校】

事例の概要

A児は小学校6年生で、自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍している。軽度知的障害と自閉症スペクトラム障害の診断を受けている。

A児は就学頃から、母子分離不安が強く、愛着形成障害の脱抑制型のような問題行動を起こし、お店の中で大声で泣いたり、姉への攻撃もあり、情緒不安定で、ちょっとした人間関係のもつれから癇癪をおこす。他人の思いが理解しづらく、自己中心的な考えで物事を進めようとするので、友達とトラブルになることが多い。癇癪をおこすと激しい暴言、他害行為があるため、向精神薬を服用している。また、学習時の書字に関しては、ほとんどがひらがな表記であり、拗音や長音、カタカナの表記についても、どのように書けばよいのかと教師に手本を書くことを要求してくることが多い。さらに、きちんと文字を書くことにこだわりがあるため、少しのゆがみも気になり、思うように書くことができない場合は、癇癪をおこし投げやりな態度になる。

そこで、A児が5年生の時、自閉症・情緒障害学級に入級し、社会性やコミュニケーション能力を育てることと、書字の課題についてタブレット型端末を用いた取組を行うことにした。書くことの負担から、授業に参加しづらくなっていた教科についてはスムーズに参加できつつある。

- | | | |
|------------|------------|------------------------|
| 1 対象児童の障害種 | 自閉症 | 知的障害 |
| 2 障害の程度 | 非該当(知的障害) | ※学校教育法施行令22条の3に該当か非該当か |
| 3 在籍状況 | 小学校・特別支援学級 | |
| 4 学年 | 小6 | |
| 5 対象児童の実態 | | |

A児はB市立C小学校の自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する6年生である。軽度知的障害と自閉症スペクトラム障害の診断がある。学習においては、教科書の音読はできるものの、書字については、ほとんどがひらがな表記で漢字の習得も1年生段階である。また、拗音や長音、カタカナの表記においても苦手なため、教師に手本を書くことを求めていることが多い。

文字をきちんと書くことにこだわりがあり、筆圧も強く、間違えると消しゴムで消しても筆跡が残ってしまったり、文字を消す際に用紙がくしゃくしゃになったりして、癇癪をおこすことがある。板書をノートに写したり、自分の意見をノートにまとめたりすることに抵抗感があるため、それらの授業に参加できないことがあった。また、テスト用紙への記入についても負担に感じ、途中で解答をやめたり、書き直している間に用紙にしわができて破り捨ててしまったりすることもあり、自己肯定感が低くなりつつある。

6 対象児童についての合意形成に至るまでの経緯

(1 誰からの申し出か 2 申し出の内容 3 連携、調整した関係機関 4 合意形成に至った結論)

A児の学習場面でのつまずきや不安感、保護者から何か手立てを考えることができないかという要望を受け、医療機関と連携し、A児の主治医から支援についてのアドバイスを受けた。また、交流学級担任と支援方法について検討し、タブレット型端末を使用することを決定した。

7 基礎的環境整備の視点と概要

基礎④ 教材の確保

B市では、ICT機器の整備により、特別支援学級1学級につき、タブレット型端末1台が支給されている。それにより、授業で容易にタブレット型端末を活用できるようになった。

基礎⑧ 交流及び共同学習の推進

A児のタブレット型端末の使用については、特別支援学級だけの利用でなく、交流及び共同学習を行っている通常の学級においても行った。A児が交流している通常の学級の児童にもA児の実態や気持ちを伝える啓発活動を行い、周囲の児童への理解を求めた上で端末の利用を実施した。

8 合理的配慮の観点と概要

合理①-1-1 学習上又は生活上の困難を改善・克服するための配慮

A児の授業での書字場面で、タブレット型端末を用い、メモ機能を使って自分の考えや意見を入力したり、板書の内容をノートに書き写す作業をカメラ機能を使って写真に撮って記録したりできるようにした。また、テストの際の記述による解答場面では、タブレット型端末を使用して解答を入力し、それを印刷してテストに添付するようにした。

合理①-2-3 心理面・健康面の配慮

タブレット型端末を用いることによって、書字への苦手意識を軽減し、参加が難しくなっていた授業や学習活動へもスムーズに参加できるように配慮した。

9 成果と課題

タブレット型端末の活用を行うようになって、書字への苦手意識が薄らぎ、授業への参加拒否や癇癪が減少し、A児の不安感も軽減された。それに伴い、苦手としていた漢字の書取練習にも、自分から少しずつ取り組めるようになってきており、学習に前向きに取り組む姿が見られるようになった。

A児が今後学習ツールとしてタブレット型端末を自分で活用できるように、ICT機器の操作や活用についての学習を進めていきたい。また、交流学級担任や専科担当とも連携しながら、授業での効果的な活用がさらにできるように工夫していきたい。